
6月のSE

みねひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

6月のSE

【Nコード】

N1111D

【作者名】

みねひこ

【あらすじ】

月面基地へ設備の保守・点検作業のために訪れた野田明。野心的な明には不満な仕事だったが、そこで出会った一組の若い男女への興味から、日常を一変させる事件に引き込まれることになる。

第1節

「6月のSE」 1

壁の手すりに軽い体重を預け、野田明はふわふわとした頼りない足取りで狭い廊下を急いでいた。転ばないよう細心の注意を払い、そして出来ることならだが、少々 of 威厳を保てるようにも気遣って月の重力との取っ組み合いは、三日間の無重力状態に慣れた筋肉には酷で、それでいて、生まれて以来1Gで動くことに慣れた運動神経には頼りなかった。初挑戦の明に勝ち目はない。繰り返し、何度もみつともなくバランスを崩してしまう。

グレーの高価な背広の下で、真っ白なワイシャツのわきと背中 of 部分が、冷たく湿っていた。顔も、脂汗でさぞかしひどい有様だろう。周りに誰もいないのが、せめてもの救いだ。

トイレの個室に無様に駆け込み、鍵を掛ける。便座を乱暴に跳ね上げて、その中に顔を差し出した。

これぞ屈伏の実感だ。汚れと臭気と脱力感に思うさま身を任せていると、深酒の習慣がない彼には、子供のころのひどい風邪ひきの経験まで溯って、心細い感情が想起された。

洗面台のスリットにEDカードを読み取らせ、水を贅沢に出し、入念に口中をすすぎ、うがいをする。ジェットタオルで手の水気を飛ばしながら、鏡に映る自分の姿を観察した。

すぐに目を逸らしたくなったが、そこを我慢して軽く唇を上 to 引いてみる。スペースプレーンの中でようやく吐き終えたかと思った直後の、月の重力による追い打ち。もはや、胃液しか残っていないかった。だが、そのただならぬ憔悴と不機嫌も、たゆまぬ努力で培った彼の笑顔を曇らせはしなかった。

自信と好意と、あるかなしかの皮肉。第一印象で、相手に侮らせてはいけない。

彼は髪の流れを手グシで整え、ネクタイの結び目を締め直し、背広に鼻を押し当てて清潔な匂いを確認した。腕時計に目をやってから、身仕度に満足ではないがトイレを後にした。

中央棟待合室は、カフェテラス仕立てになっていた。プラスチックの白いテーブルが適当な間隔を置いて据え付けられ、同様の椅子も二・三脚ずつ雑然と付き添っている。壁際には、飲物や軽食の自動販売機がずらりと。人はいなかった。

明は、案内役がまだ来ていないことに気を悪くした。どうせ搬出は済んでいないだろうが、先に荷物の受け取りに行つてやろうか、と思う。だが実際そうもいかないのも、彼は何食わぬ面持ちで椅子に腰を下ろした。

しかし、胸焼けの嫌な感覚を忘れるほどになつても、彼は一人きりにされていた。何か手違いがあつたのかと心配になる。とは言え、ちよつと声を掛けて確認する相手もない。月と地球を結ぶスペースプレーンの発着場は高度に自動化され、大変に高価に付く月面での人員を節約していた。

ほとんど音もなく、部屋を囲むドアの一つがスライドした。反射的に、穏やかな気持ちがそれまでの不機嫌を押しつけた。その変化を自覚しながら、意識的に表情を開放す。

相手も、まっすぐに明と視線を合わせた。東洋人にしては珍しいくらい社交的な、無邪気にさえ見える笑顔で彼女は応えた。ためらいなく、慌てもせずに近づいてくる。地球のおよそ六分の一、という以上に異質な実感の重力を、ものともしていない。白鷺のような優雅な鳥が、もし水の中で生まれていれば、多分こんな風に泳ぐのだろう。

「こんにちは」と、彼女。

日本人なのか、と思う。「こんにちは」

明は、暖かい歓迎の言葉と早速の案内を期待して、席を立った。

「あら、どうぞ座っていらしてください」

にこにこしてそう言う彼女に、明はどういうことか呑み込みかね

て、不覚にも一瞬、呆けてしまった。すぐに案内をしてくれるつもりはないのか？

だが、とにかく気を取り直し、彼女のために椅子を引いた。「ありがとう。どうぞ、あなたもこちらに」

彼女が横を通ると、若いリンゴの香りが小さく風を巻いた。弱っていた腹の虫が、ふと空腹を思い出す。子供っぽい香水だ。

「NT&Tの方ですね。月にはお仕事で？」と、彼女。

「はい。もちろん、そう願います。簡単な定期点検ですけどね」それともちろん、明は新たなサービス商品や回線を売り込む使命も担っていた。

「月には、たったお一人で…？」

「ええ、今回は三週間ほどの短い仕事なので」

「お若いのに優秀なんですね」

彼女は、本当に感心したように言っただけだ。

優秀？ 何が？ 同期の中には、クアランプールで都市圏規模の新ネットワーク計画を手懸けている奴もいる。来月か再来月には、中国の青島への出張が内定している後輩すらいる。それなのに自分と来たら、各国の協定が入り乱れて、とうてい大きな受注など期待できない、こんな月くんだりまで送り出されているのだ。膨大なチエックリストをマニュアル通りにこなして点検を終えた後は、とつと地球に送り返されるのが落ちだ。

「ハハ」お茶を濁し、「ところで、あなたは日本の方ですよ」

「そうですよ。父と友人以外、この月で初めて日本人を見かけたものですから、嬉しくてつい話しかけてしまいました」

彼女の謙譲的な好意の表明には、媚びた嫌味をおわせるところがなかった。それどころか、成熟した自信の下地をうかがわせる。

明はその魅力を堪能すると同時に、彼女の資質に対する嫉妬がうずいた。習慣的に、自分にそれほどの印象を与える相手の容姿をさりげなく、しかし十分にじつくりと観察した。すると、初めに目に入ったとき感じたように、まず非の打ち所のない美人、というほ

どではないことに気が付いた。それでも、あるいはそれだからこそ、彼女は相手に無条件で友情や、何かそういったものを抱かせる資質に恵まれているようだ。

といったことを考えながら、明は彼女の言い回しに覚える違和感に気付いた。つい、話しかけたとは。

「…ちよつと待ってください。あなたは、私の案内に来てくださった方ではないのですか？」

「あ、ごめんなさい。何か勘違いをさせてしまったんですね。わたしはただの観光客なんです。同じ便に乗ってたと思いますよ？一緒に来た友人が、今荷物を取りに行ってくれているので」

明は落胆した。これから彼女と仕事を交える、楽しい期待感が泡と消える。だがものは考えようで、彼女が別段用もなく話しかけてきたことを、希望的に解釈することもできた。

「では、よくNT&Tの者だと分かりましたね」

明の態度は、先ほどまでよりリラックスの度合いを微妙に増した。

彼女の雰囲気も、敏感にそれを察して変わったようだった。得意気に、おどけたように、自分の襟をつまんでみせた。

「ああ、社員章…」明の襟元にある、日本有数の優良企業の一員であることの証。「では改めまして。野田明です。どうぞよろしく」

「川上響子です」

彼女はお互いの素性を明かし合ったところでひとまず満足したのか、それから涼やかに横を向き、窓の外を眺めた。明は肩透かしを受けた気分がした。まあ、勢い込んで質問合戦を始めるのも面倒か。

明も、おとなしく同じ風景に目をやった。風もない、荒涼で静かな月面。ただ、意外なほど近くに迫る明瞭な地平線の広がり、一見の価値が認められるだけだ。退屈だと決めつけても、感性をけなされるいわれはない。だが、わざわざ彼女に同意を求めるような馬鹿げたこともしない。

頬杖をつきながら、横目で彼女の顔を見てとる。いつの間にか、彼女の口許は綻んでいた。何か楽しい物思いがこぼれているのだ。明は、彼女が今そんなに幸せそうにしている理由について、是非とも話を聞いてみたかった。しかし、呼びかけるのにぶしつけでない機会を待つには、根気がいりそうだった。

彼女が窓から目を離して、ふと小首を傾げた。すると、明とまともにも目が合った。明が何かを言い出す前に、彼女の視線がはずれた。

一息に解きほぐれて、花開くような彼女の素顔！ 明はその鮮やかな変化に目を見張った。身体をねじって、彼女をそんなふうに反応させる相手を探す。

なぜか、怒ったような顔つきの、陰気な男がドアの横に立っていた。明をにらんでいるようで、そうではない。響子を見ているわけでもなく、さりとて窓の外に見惚れているわけでもなかった。要するに、ただ突っ立っているのだ。

細面で、まあ整った顔立ちだ。…実のところ、CMの中でしか見かけない程の美形と表現しても当たっているのかもしれない。

川上響子は未練気もなく立ち上がった。「お仕事、がんばってくださいね」と、さっさと行ってしまふ。

「ありがとう」去り際の彼女に、明はやっとそれだけ言うことができた。

彼女が男に歩み寄る足取りは、心持ち軽かった。男はとうとう明を見ようとせず、黙ったまま、入ってきたのは別のドアから出ていってしまった。川上響子が後に続く。

地球を遠く離れている自分の孤独を、ぼんやりと思う。

そうして呆気にとられていても仕方がない。明は自動販売機を見て周り、リンゴジュースに目が止まったのでそれを買った。手近に椅子に腰を掛け、冷たいジュースをストローで吸う。

それにしても、まだ迎えは来ない。点検手順の予習をしようか、売り込みの心構えを準備しようか。だが、こうして放っておかれて

いるのに、そう勤勉に励むのは何だが癪な気がする。

先ほどの出来事が感覚の断片として浮かび漂うまま、彼の意識を占領した。

あれは恋人同士だったのだろうか。川上響子は、確か友人を待っていると言っていた。そして来たのが同年代の男だったのだから、彼は恋人だと考えるのが筋だ。しかし、月はまだ気軽に観光客が訪れるほどには開発が進んでいない。宿泊施設だって、わずかに関係者用の予備があるだけだ。つまり、彼女がここにいると言っていた父親のついで、利用を許可されているといったところだろう。地球でのまともな暮らしから、しばらく確実に切り放される月の研究員や職員には、そうするだけの特権が与えられている。

となると、あの男はどういう名目で彼女に付いてきているのか。

恋人：友人：夫：？ 何にしても、彼女は趣味が悪い。あるいは、この点に限って言えば愚かだ。

何を考えているか分からない二ヒルを気取った男など、大抵が袋小路でふてくされているだけのガキだというのに。そうした自分の実力と虚栄心との間で折合いが付けられない輩が、たまたま十人並以上の容姿を持ち合わせていると、乙女は勝手に別世界の住民を重ね見たがる。

おまえに彼女はふさわしくないよ、と明は声には出さずに言った。彼女の人生は、もっと実りある方向を目指すべきだ。そのためのほんの手助けとして、少し目先を変えるきっかけを示してみよう。選ぶのは彼女だ。

「おや、まだこんな所にいたんですか」

突然の大きな声の呼びかけに、明はびくりと反応した。

「居住棟の行き方が分からなかったんですか？ まあ、不勉強なまま動き回られても困るのは我々ですからね。変な場所に入られたりしないで良かった、としておきましょう。じゃあ、行きますよ」

「え、ああ……」

言いつばなしで先に行ってしまう男の背中を、明は慌てて追い掛

けた。

明が追いつくと、男は、「なんだ、荷物も取ってきてなかったんですか。それならこっちはありませんよ。あなた、どこの人でしたっけ？」

また人違いか？「NT&Tです」明は、ブスリとして答えた。

「NT、&…T?…。ああ、はいはい、知ってます。確か、中国かその辺りの」

「本社は日本です」

「あ、そうなんですか。それでは、先に荷物を取ってきてください。まさか、荷物まで私に取って来させるつもりじゃ、ないですよね」

明は目を白黒させたが、黙って言われる通りにした。そうでもしなければ、明は分別も忘れて、ここでの仕事のわずかな望みまで乱暴に捨て去るところだった。

第2節

「6月のSE」 2

月での仕事は、明が考えていたよりもはるかに困難だった。先輩や上司から、月ならではの注意をいくつも受けてはいたが、その中には明らかに単なる冗談としての脅かしも混じっていたので、明は全体として彼らの忠告に重きを置いていなかった。だが少なくとも、月に派遣されたSEは、システムの補修・管理とセールスのほかに、およそあらゆる電気現場作業員の仕事まで負わされるという下りは、真実だったらしい。

月に来てから一週間が過ぎたその日、明は前半活動シフトで、月面天文台に通じる情報回線の一つが使えなくなった原因が、通信ケーブルのどこかの地点での断線にあることを突き止めた。それを基地における責任者に伝えたと、直ちに修理するよう注文を受けた。その注文を地球の上司に伝えたと、明が自分でやるよう命令された。明は念のため、もう一度詳細を説明したが、やはり命令は変わらなかった。

昼の休憩時間は外出のための事務手続きに追われ、丸々つぶれた。後半活動シフトに入ると、宇宙服を着た明はまず出発地点に立ち、しげしげと通信ケーブルを見つめるところから始めた。CGでない本物のケーブルを、まさかしらみつぶしに点検させられようとは。

地表にまだむき出しで敷設されている通信ケーブルに沿って、バギーを走らせること二時間余り。明はようやく目的の断線箇所を発見して、車を止めた。

とにかく、一日のうちに一仕事終わることができた。昼食だか夕食だかは分からないが、空腹には上々の配膳を平らげた後、明は疲れた体を癒すためにジムを訪れることにした。もちろん、本日が

丸々残っている規定の運動メニューを非情に表示する運動器具ではなく、ポコポコとのんきに泡を立てる温泉を目指してだ。

それともう一つ。明は、全身のマッサージと睡眠だけでなく、心の安らぎも切実に欲していた。

果たせるかな、広くにぎやかなジムの中、彼女の姿はあった。

「おはよう！」明が自身意図した以上に、元気な声が出てしまった。

「おはよう」と、響子。

小気味良く上気した彼女の頬。ハンドルを握った腕と、それと直結して連動するペダルを軽やかに踏むリズムは乱れない。滑るような仮想歩行を続けながら、響子は明の訪れを無条件に歓迎していた。

人種と国籍と言語が入り乱れた喧噪。基地の他の場所に共通する無機質な機能性の主張が、ここでは恐ろしく控えめだ。エネルギーも物資もサービスマンも、月の諸人を励ますため、一時的に節約の美德も忘れたように費やされている。こういったところで響子のような女性と逢っていると、人類愛というものが世界を包んでいるのだと、つい信じたくなってしまふ。

響子の前面を囲むスクリーンを覗くと、濃密な雲をかぶった緑の山脈が眼下に広がっていた。彼女は空においては何者も寄せ付けない鳥類の王者、あるいは羽根を持った聖なる何者かのように、その風景を独占して爽快に駆け巡っていた。やがて、彼女はそこから駆け昇る。ぐんぐんと、霞の中を突き進む。そして見下ろすと地上はなく、代わりにあくまで白く立体的な雲海が、地平線まで続いていた。

彼方に横たわる陽射しの源は、強烈な存在だ。雲と太陽は大空で結託して、壮大な共同作品を誇示していた。背景となっているはるかな青は、彼らの古い友人からの贈り物。まったく白のダイナミックな造形と、そこに織り成される陰影こそ、その主題。また、そのような巨魁の連なりがぼつかりと浮かんでいる印象は、人間の感覚

に対する刺激的な挑発、アクセントだ。

これ以上雲が少なければ物足りないし、これ以上発達して大きくなれば、個別の表情が失われ、またその完璧な白さから永遠に見放される。絶妙な空の一場面だった。

と、また響子は上昇に転じた。やがて雲は立体であることをやめて小さな模様となり、青い空は知らないうちに突き抜けて宇宙の暗さが辺りを覆い、ついに地球の輪郭が捉えられるようになった。

「これはいいな。僕も今度、このプログラムを試してみよう。なんというの？」

「イカロスの再挑戦！」

澁刺として、響子は言い放った。

「へえ。すると、最後には墜落していくわけだ」

「ふふ、それも楽しいかもね。でも、さすがにイカロスは賢いわよ。一度の失敗を、次回の成功につなげてるもの。目指すはここ、お月様。それなら、ロウの羽根も大丈夫でしょ」

「残念だな」

「え、どうして？」

「一度、あなたの取り乱した様子も見てみたいと思つてね」

明はその一言に、情感をたつぷりと込めた。と同時に、彼女を見つめる。

「いやだ。面白いものじゃないわよ」

明の一步踏み込んだ親しみを、響子はただ呼吸した。浴びるほどの愛情に慣れ親しんだ者だけに許された、傲慢なほど淡泊な自意識、あるいは無防備に開かれた心を、彼女は持っているようだ。

それから明は隣の機具にもたれかかり、彼女がスペースプレーンをはるかに上回る速度で月に歩み飛翔していくのを、いっしょに眺めていた。時に人工衛星とニアミスしたり、宇宙ステーションの船外作業員が遠くで手を振ったりして、なかなか飽きさせない。健脚をもつてなるイカロスなので、途中、ステーションで月連絡船に乗り換えたりはしなかった。

二人はプログラムが提供するイベントに、声を挙げていちいち一喜一憂した。

「あなたは、歩かないの？」

月の周回軌道に乗り、いよいよ舞い下りようとするところで、響子が聞いた。

「疲れてるんだ。とてもそんな元気はないよ」

「うーん、おじいちゃんの言い訳ね。1日1日ちゃんとこなしていないと、そのうちカウンセラーに呼び出されるわよ」

「それもごめんだけどね。だけどそれを言ったら、あなたのお友達こそだよ。僕がここに来てから一週間で、彼を見かけたのは最初の日、宙港の待合室でちらりとだけだ。一方で、あなたとはほぼ毎日、ここにくれば会えるらしい。別にそのことについて文句はないし、嬉しいことだと告白するけど、あなたのお友達はいつたいいつ、運動ノルマを消化してるの？」

彼女との間で、そのボーイフレンドの話題を持ち出すのは初めてだった。

「彼、最近忙しいからね……」

イカロスは月面に足をつき、ぐるりと月面を見渡した。見えるのは峻烈にそびえる岩山と、ギザギザの地面、それに『海』と呼ばれる滑らかなクレーター。

それから、おもむろに振り仰ぐ。そこには、暗い宇宙の中で絢爛たる澄んだ青い光をたたえた、けなげな地球。器具の外にいる明にはよそよそしく聞こえるだけだが、音響の焦点にいる響子には圧倒的な臨場感でエンディングの感動的な音楽が迫っているはずだ。

なのに、彼女は寂しそうだった。明は、無性に苛立たしくなった。

「忙しいのは、僕も同じだけどね」

彼の呟きに、響子は顔を上げてきょとんとした。それから彼への関心を思い出し、「今日はどんなお仕事をしてきたの？」

響子の屈託のない気分の切り替えに、明は内心で賞賛を送った。

まったく、彼女は心得ている。

「さっきまで、月の裏側にいたんだよ」

「え、本当に？」

響子は明の予想以上に興味を示した。明は面食らいながらも、張り切って先を続けた。「本当だよ。しかも、一人で。基地の連中、小型のバギーをしぶしぶ一台やつと貸してくれたはいいいけど、案内の一人もつけてくれなかったんだ」

「へえ。わたしも、月の裏側にバギーで行ったことあるんだよ」

響子は秘密めかして、明を見つめた。明は、これから断線箇所を見つけて、応急処置を施すまでの苦労を話そうと思っていたのだが、社交性を自認する彼としては、彼女の話に先を譲らざるをえない。

「どうして？」と、明。

「わたしの父は、天文台で働いてるの。時々は職場に顔を出して、驚かしてあげないとね」

月面天文台は、月の裏側に孤立して建っている。そのため、職員や物資を行き来させる必要から、生活設備が集中している基地中枢とはバスで結ばれていたはずだ。父親とはもちろん毎日会えるだろうし、天文台へ行きたいのならバスに相乗りすればいいだけだ。わざわざ足の遅いバギーで訪ねて行く心境がわからない。

「あなたも変わった人だな。たった一人で、まともに無線も使えない裏側に出かけて行くななんて、危険じゃないか」

地球が発する様々な雑音も、月の裏側までには遮られる。その電磁的静寂を天文台が利用するため、月の裏側には無線使用禁止の原則がある。これは通信衛星を使ったナビゲーションシステムの使用さえ禁止するものなので、天文台職員やインフラ整備関係者以外が境界線より向こう側に立ち入ることはまずなかった。

響子があえて自分の身を危険にさらすような逸脱行為を好む性癖を持っているのなら、誰かがたしなめておかなければいけない。明は険しい顔をした。

「一人じゃないわよ。ちゃんと司と二人で行っているから、大丈夫」

司 あが目付きの悪い男は、一柳司というらしい。結局、彼女はのろけを言いたくてこんな方向に話を持ってきただけだったのか。彼女の身を案じた明など、いい面の皮だ。

「一人でも二人でも変わらない。ここは地球じゃないんだ。どんな事故だっていつ簡単に起こるか知れない。現に今日、僕は太くて頑丈なはずのケーブルがずたずたになっているのを見てきた。おそらく、ごく小さな隕石の衝突だろう。もし単独行動している無責任な誰かがあのケーブルと同じ目にあつたら、宇宙開発の計画全体にどんな影響が及ぶか分からないんだよ」

明は無感動な表情と声音で、一気にまくし立てた。

言い終わると、響子はその叱責をともに受け止めて黙りこくってしまったていた。明は子供っぽい感情に流されて、八つ当たりじみたことをした自分に気づいた。

「ごめんなさい」しゅんとした響子。

「ばつが悪いのは明のほうだった。「いや……。でも、デートするならどこか他にあるだろうに」

「誤解しないで、デートなんかじゃないの。彼はまじめな人だから、そんな理由で羽目を外したりしないわ」

「じゃあ、なに」

響子は一息吸い込み、「彼、画家の卵なの！」

それだけで説明は十分だとも思ったのか、響子は得意げにして明の次の句を待った。

「つまり、どういうこと？」

このように会話がちぐはぐなのは、おそらく自分が鈍いからではない。

明にとって、響子のイメージは初めの時と比べてだいぶ変わっていた。ある理想像にどれだけ近いのか、の指標ではもう計れなくなり、複雑で個性的な彼女自身として、明は認識を組み替えざるを得なくなっていた。

「分からないかなあ。だからね わたしをね」 彼女は自分の鼻の頭辺りを指差し、につこりと、「モデルにしたいんだって！ それで、この月面でイメージを膨らませなければいけないの。誰もいないところで、静かにね」

明の取り残された沈黙をよそに、響子の相好は今にも崩れそうだった。だが、それを彼女は瀬戸際で我慢しようとしているため、なおさら、その行儀は無調法に映った。明が興味深くじっと観ていると、とうとう彼女は両手に顔を伏せ、どうしようもないハッピーな感情の噴出とひとしきり格闘した。

明はようやく合点がいった。彼女がさっきから、歓びのおすそ分けどうぞと差し出してくれていたのだ。聞こえないように、ため息をつく。

「ああ、そういうことね」

「うん、そういうことなの」

響子の手放しの喜びようは、見ていて嫌味の一つも言いたくなるほどであった。歴史に残る大家から、二束三文にもならない落書き絵描きまで、古今東西『画家』が恋人をモデルにするなど、当たり前の話ではないか。

体の底から疲れと眠気に教われ、彼女と調子を合わせるのがどうにも億劫になった。

「それでは、僕はもう行くよ」

「また明日ね」

明は振り返りもせず、手を振った。

明日のことを考えて、風呂にだけはなんとか浸かっておいた。とにかく、今は早く眠りたい。ジムを出ると、すぐにも倒れ込みそうな気がしたが、ありがたいことに月の重力はこんな時でも歩行を許してくれた。

自室まで、長い道程だ。明はその間、夢うつつでベッドに身を投げ出す瞬間だけを思い描いていた。が、ふと嫌な感触の記憶が持ち上がった。あまりそれを追求したくはなかった。翌日、頭がすつき

りしてから対処したほうがいいだろう、という魅惑的な理屈には抗しがたかった。

そうもいかない。ちょっと意識を向けただけで、その記憶ははっきりとした。すなわち、職務。今日中に、トラブルの結果報告だけはしておかなければならない。どうせ回線の修繕は成功したのだから報告は明日でも良さそうなものだが、そうした怠慢のどれか一つが、まかり間違って人物査定に影響してはたまらない。

明がいる場所から一番近い地球との通信設備は、居住棟の公衆電話だった。後戻りしなくて済むだけ、助かった。

明の部屋が割り当てられているブロックの公衆電話は、幸い誰も使っていなかった。もっとも、明がここに来てから一週間あまり、一人でも使用者を見かけたことはなかったのだが。こんな状況でな
お回線を売り込めとは、会社はよくも言えたものだ。

疲労困ぱい。魅力的な女性との会話では、のろけられたばかり。こんな状態では、さしもの明でも愛想の泉が枯れている気がした。わざわざ泉の底を掘り返して、英雄的な努力で笑顔を汲み出すよりは、カメラのスイッチを切ったほうが早い。電話のスリットにカードを通し、直通ダイヤルを入力する前に明はそうした。

「はい、こちらシステム営業課・小林です」

受話器を取った相手は、明にとって親しい先輩だった。

「小林さん。お久しぶりです。野田です。」思わず安堵の気持ちが生み出る。

「おお、久しぶり。ってことは、これは月からか」

「はい」

「どうした、映像が届いてないぞ」

「ああ、カメラを切っているんです。すみません、ちょっと疲れているので」

「構わんよ。なら、無駄口をきいてもいられないな。用件は？」

「今日、課長から破損したケーブルの修理をやるように言われてたんですけど、無事終わったのでその報告です」

「ハハっ、なに、お前ケーブルの修理なんてやらされたの？」小林は遠慮なく、さもおかしそうに笑った。

明は自分の苦勞を思っ、小林の無頓着に腹を立てても良いかも考えたが、一方で不思議と気分が楽になった。案外、そんなものか。苦勞やつらい境遇など、自分だけで思い詰めるほど、大袈裟に見えてくるだけなのかもしれない。

「そうなんですよ。月の裏側まで駆け回りました」と、明も素直に愚痴をこぼした。

「それはご苦勞さま。じゃ、課長に替ろうか？」

「あ、いえ、結構です。ただ、報告だけ入れておくように言われていたので。伝えておいてもらえますか」

「そうか、分かった。で、どうしてまたケーブルが破損なんてしたんだ？」

「さあ、原因は不明なんですけど、ほら、月の通信ケーブルはまだほとんどが野ざらしじゃないですか。それで多分、隕石が昔の小さい観測器の欠片が落ちてきたりして、たまたまケーブルにぶつかったんじゃないか、って基地の人は言ってるんですけどね」

「ふうん…」小林は神妙そうに考え込んでから、「もしかして、また例の団体の仕業じゃないのか」と、電話越しでほとんど内緒話をしているかのようにささやいた。

「例の団体とは？」

「ほら、お前がそっちへ行く前に教えてやっただろう。例の団体のことだよ」

「例の団体…」明は頭をひねり、思い当たった。「まさか」

「俺が担当していたときも随分悩まされたが、最近はずますます悪質になっていくようだ。お前も気を付けろよ。じゃあ」

「ちよ、ちよっと。それって本当に」

プ、と電話は一方的に切られた。

麻痺したような頭で、明は空しく思考をかき集めた。例の団体『宗教法人 岩戸の守』。

月そのものを日本神話に出てくる天の岩戸に見立てて、今でもそこに隠れているという天照大神の安寧を守護することで、来世での幸福を願う、とかなんとかいった教義を掲げている。さして大きくはないし、過激でもないとされる団体だが、宇宙開発計画をやり玉に挙げて世論をしばしば刺激するので、関係者にとっては厄介な相手だった。

信者の中には一流の経済学を修めている者もいるらしい。彼らによる宇宙開発計画の頼りない採算性の指摘や、その根拠となる統計的・数学的分析、対案としての国家予算の最適配分への提言などには、専門家をもうならせる説得力があった。

そんなわけで、教義の理解はともかく、『岩戸の守』は社会的に信用を得ている。一般的な認識としては、ちよつと偏った主張を掲げる、個性的だが優秀なシンクタンク、といったところだ。

ところが一年ほど前、『岩戸の守』名義の脅迫状が、月面開発計画の関係各社に送り付けられた。その際はさすがに教団に対する逆風も吹いたが、彼ら自身が直情的なほど向きになって否定し、かつ何の証拠も挙がらないまま続く出来事も起こらなかったで、このニュースは程なくして忘れ去られた。

ただし、例外もある。脅迫状が送り付けられた関係各社の中には、NT&Tも入っていた。他の企業ではどうか知らないが、話題が収まってから後も、社内では『岩戸の守』の名が頻繁に聞かれるようになった。とは言っても、月面開発に携わる若手社員が、仲間内で失敗談を笑い合う中でのことである。システムに不具合が出る度、売り込みが失敗するたびに、彼らの名があげつらわれていた。

結局、小林が言っていたのもそうした冷やかしに過ぎなかったのだろう。彼は、真顔で平然と嘘をつく癖を持っている。明がいろいろと指導を仰いで質問をすると、返ってくる答えはまず嘘であることが多かった。それも、人をどきりとさせるような、ブラックジョークが好みらしい。彼から正確な情報を引き出すには、いったん笑い流して、もう一度聞き返す手間が必要だった。時には二度、三

度。小林に悪気はないので慣れると愉快だが、疲れていると少々苛立たしいときもある。たとえば、今のようになだ。

小林のいつもの冗談。仲間内の悪ふざけ。そうに違いない。当たり前ではないか。

明は寝不足で過敏になっている心を強引にねじ伏せながら、通信室を出た。

それから幾らも歩かないうち ふと顔を上げると、明はびくりとし、反射的に身を引いた。驚くほどすぐ間近に人影があつた。目に入ってから一瞬、それが人だと分らないほど、彼は静寂に身を包んでいた。どきどきする心臓。喉の奥が詰まって声が出ない。

無言で身動きもしないその横顔。長くて薄暗い廊下の窓際に、脈絡もなく立っている。まるで幽鬼のように表情に欠けて…。

彼だと気づくのに、その顔かたちでなく、そうした雰囲気かまらず手がかりとなつた。

「や、やあ、司君。と、失礼、一柳さん。川上さんによく君のことを聞かされていたので、つい。なれなれしかったかな」

ハ、ハハ、と明が笑う。司はそちらに眼を向けると、かすかに頭を下げた。その動きが余りに微かだったので、明が挨拶を返すベきか迷っているうちに、司はさつさとして行ってしまった。それは明の進行方向でもあつたが、彼に追い付いて並んで歩く気にはならなかつた。

月の重力のせいで、歩き方まで亡霊さながら漂うようで、真に迫っていた。

いったい彼は、こんなところで一人、窓の外を眺めて何を思っていたのだらう。明が見ても、そこには嫌になるくらいお馴染みになつた、不毛な月面が広がるだけだ。こんなところに太古の女神が眠っていると考える輩もいるのだから、彼のような変わり者になら何が見出せるやら…。

そこまで考えて、明ははっとして司に目を戻した。ゆらりゆらりと離れて行く遠い背中。明は子供じみた恐怖を思い出し、自分の背

後に誰も立っていないことを、振り返って確かめずにいらなかった。

第3節

「6月のSE」 3

三十分待った。もう限界だ。どちらが相手を待たせられるかを競うゲームなら、地球でやってくれ。

明は前日のトレーニングの際、響子にムーンスカッシュの試合と、ちゃんとした食事を申し込んでいた。手始めのデートのつもりだ。自信はあった。彼女とはここに来てから十日間も毎日ジムで顔を合わせているし、その度ごとに二人の心が通い合う実感を深めていた。一方、司は響子さえも閉めだして、部屋にこもりきりらしい。

詰まるところ、以前は知らず今の時点では、あの不愛想で身勝手な画家の卵とやらよりも、明のほうがよっぽど響子の気持ちを占めているに違いないのだ。そうあってしかるべき手順は踏んでいる。

案の定、彼の申し出は快諾された。そういう結果が出てから明はやつと、如才なく拒絶される不安も大きかったことを自分に認めることができた。

明は、仕事のスケジュールをデートの前と後ろに押しつめていた。月面での最高の思い出となるであろう大切な時間を作り上げるため、熱烈な意欲をもって相当な苦労も受容した。

ところが、のこの仕打ちだ。明は憤然として食堂を出た。いくらなんでも、今度こそは響子を見損なった。結局彼女も、学生時代に散々見てきた過剰なフェミニストの一人だったのか。こと男女間の付き合いに関して、この強大な女性一派は、自分たちの怠慢や身勝手を恐ろしく気軽に男の甲斐性で担わせようとする。中学生の时分なら明も甘んじて翻弄されるに任せたが、ようやく目が覚めた大学時代を経て社会人になった今、再び過去の無益な努力を繰り返す

つもりはなかった。

ただし、このままおめおめと引き下がるのも男がすたる。響子に遅刻の理由を聞いてやろう。あくまで礼儀正しく、かつ派遣SEたる彼にとって、月面での時間がいかに貴重かの説明を丁寧に交えながら。

ところが、いざ響子の部屋の前まで来てみると、明の鼓動は早くなっていた。

この扉を開けさえすれば、本当に彼女と逢えるのだろうか。そうしたら、第一声はどうしよう。表情は、穏やかで少し寂しげな微笑でどうだろう。そうだ、もしかしたら司がいるかもしれない。最悪の予想が現実になっていとしたら、いったいどう対応したものか。怒りで自制が利かなくなることなど、実際あり得るのだろうか。だがそもそも、最悪の予想などまず当たりはしないものだ。

ふう……。深く、息を吐く。

なおも緊張は高まりながら、表情のほうは明のほぼ望んだ通りに仕上がっていた。意を決し、コンコン、と中指の裏をドアに当てる。

ドアは開かなかった。部屋番号を確かめる。響子の部屋に間違いなかった。ドアの覗き穴にちらと目をやり、今度はインターホンを押してみる。

するとすぐに、「はい、」とマイクを通して返事があった。

「野田です」

「あ、ああ、野田さん。ちょっと待つてね」

ドアは開き、響子が立っていた。明のものと同様に狭い室内に、恐れていた男の姿はなかった。

ほっとして、「どうしたの」と、口をついて出た。幼稚な詰問調に聞こえたかもしれない。

「うつん、どうしてないわよ。どうかしてるように見える？」

どうもしてない、はないだろう。デートの約束をすっぱかしておいて。しかも、彼女はこの期に及んでも、約束したこと自体をすっ

かり忘れていゝらしい。

落ち着きを主張しながらも、ぶんぶんと首を振る様子で明らかな響子の狼狽振りに、明は看過できない異常を認めていた。彼女の表情はいつもより乏しく、正直者が嘘をついているときの典型のようにさえ見えた。どこか放心しているようでもある。居眠りでもしていたというのならいいのだが。

「そうか。それならいいんだけど…。でも、もし困ったことなんかがあったら、気軽に俺に声をかけてよ。どうせ何もできないだろうから、遠慮なんかいらない」

「ありがとう。じゃあ、その時はよろしくね」

「ん、ぜひ」

と、右手を挙げそうになる。そうはいかない。明はすでに思いとどまって、会話をつなげようと糸口を探した。何しろ、彼女は部屋の敷居を一步たりとも出ようとしないのだ。それどころか、この分では明との約束を思い出す気配さえない。それをただ放つてはおけないだろう。おそらく核心は

「ところで、一柳さんはどうしたの？」

目に見えて響子が反応した。まるであの男への言及が、小石となつて彼女を不意打ちでもしたかのようになつた。

間髪をいれず、明は言葉を継いだ。「そう言えばこの間、その廊下で彼とばつたり会つたよ。その時は僕も疲れていてはつきりとは覚えていないんだけど、何かを思い詰めているようにも見えたな」

「ええ、やつぱり…そんな風だった？」

「やはり、とは。つまり、何かあるのはあなたではなく、彼だと言うことかな」

問い詰めて目をそらそうとしない明に、響子は折れた。

「そうね、何も無いとは言えないわね。でも、ごめんなさい、今は言えないの」

「どうして」

「だって」

そこに来て、響子は感情のかく乱に巻き込まれたらしく、顔を伏せた。肩を震わせ、うめき、嗚咽が漏れる。

「響子さん」

上目がちに、彼女は少しだけ顔を上げた。「ごめんなさい。その内に」

響子の顔は苦しそうに紅潮していた。心配を訴えかけようとする明の目の前で、扉は閉められた。

こうして、その日の後半活動シフトの予定は、丸まる空白となった。自室に戻り、ベッドに目を落とす。反対の壁際には、給湯ポットと簡単なながら和洋のティーセットが備え付けられている。

習慣的に、玄米茶を煎れた。立ったまま三分ほど待ち、ティーバッグを急須から出す。熱いお茶を湯飲みに注ぐと、ベッドに腰掛け、一口すすった。

女性に、こうまであしらわれたのは久しぶりの経験だった。余りに話にならないので、ダメージはそれほど大きくないが、恥ずかしさで消え入りたくなるには十分だった。だが、自分を屈したりはしたくない。こんな時に冷静でいられてこそ、自尊心を抱くに値する。だから、この一杯を飲み干したら部屋から出よう。落ち込むままに眠っては、決められたシフトと体内時間がずれてしまう。

お茶はなかなかなくならなかった。ぬるい感触を唇に覚える。

これまでジムなどで積み重ねた響子との会話の記憶が、明を責め立てていた。ああして明が特別な好意を伝えている時も、響子は一般的な善意を返してしてくれただけなのだろう。それを勘違いして、空回りを演じて…。

だが、公平な視点から考えてみると、彼女はちゃんと分かって振る舞っていたのかもしれない。喜ばしい新たな出会い。明け透けで清潔な交友。二人きりでの長い会話を通じた相互理解。つまり、ここが限界だったのだ。明はそれ以上、踏み込むべきではなかった。彼は己惚れと性急さから間違いを犯し、当然の壁にぶつかって苦

みを味わった。これを駆け引きの為のポーズととって、なお秋波を送り続けるほどのた迷惑なタフさを、明は持っていない。

うん、親切で正直な意思表示だ。素直に受け取ろう。次に逢うときは、何事もなかったかのようにしなければならぬ。

それにしても、響子は取り乱していた。何があったのだろう、司に。それとも、司と。

いや、いずれにしろ、もう自分には関係のないことだった。

第4節

「6月のSE」 4

明は結局、落ち込んだ物思いにふけった挙句、いつの間にかベッドに横になって眠ってしまっていた。普段着のまま、風呂にも入っていないかったため、明けてその日は一日中身体がだるかった。

考えてみると、月に来てからはろくに休みもなく、働きづめである。昨日は無理して予定を空けたのであって、内容からしても到底休養になったとは言えない。とはいえ、月での滞在予定は、今日を含めてあと九日。最後の帰還日は使えないし、その前日は帰る準備をしなければならぬので、渡された仕事のリストをすべてチェックするためには、油断のならない日数だ。

N T & Tの労働条件では、週休三日が明確に規定してあったわけか。帰ったら、この間の自分の扱いがどうなっているのか、試しに聞いてみよう。今月の手当てが楽しみだ。

昨日に引き続き、今日も響子はジムに来ていなかった。まだ心の整理がついていないので、明はほっとした。だが、明日には逢いたいものだ。

次の日。またも、ジムに響子は来ていなかった。明は、いつもより長めに体を動かした。それでも結局、彼女は来なかった。

そんな調子で、更に三日がすぎた。一日の仕事から解放されて風呂に入るとき、そして眠りに落ちる前などに、響子のことを思ってくよくよすることもあったが、徐々に野心的な情熱は、ぬるく苦い諦めへと変わっていった。

それからまた四日が過ぎた活動シフト。月での仕事のスケジュールも今日までで、明日は帰る準備の為に当てなければならない。そ

う思うと集中力が高まり、満足のいく能率で仕事をこなすことができた。

昼食を後回しにして次から次へと作業を追って行くうちに、四時間が過ぎていた。その甲斐あって、省略できない仕事で残るは、基地責任者への報告だけになっていた。

神経が昂ぶって頭は冴えていたが、経験上そろそろ休憩を入れなければミスが増えることも分かっていた。空腹の感覚は無視できないような虚脱感を伴い出してきたので、居住棟のいつもの食堂で、手っ取り早くサンドイッチでもつまんでおくことにした。

活動シフトの食事時間ではないはずだが、食堂は意外ににぎわっていた。席は二十人分ほどしかない小さな部屋だが、今みたいに半分以上の席が埋まっているのは珍しい。その様子で思い出したのだが、今日は日曜日なのだった。皆、ゆとりの時間を過ごしているのだ。うらやましいことだ。

自販機からからサンドイッチセツトを落とし、賑わいから少しでも遠ざかった隅のほうで席を探した。すると、小さな二人用の丸テーブルを挟み、響子と司がいるのを見つけた。二人とも熱心に話しかんでおり、こちらには気がつかないようだ。

これ幸いと、明も気がつかなかったことにして、声をかけたりせず、二人からは少し離れたその場で席に着いた。今の明に、割って入るのに失敗した恋人たちに向かって、何食わぬ顔で挨拶を投げかける余裕はなかった。

別段そう望まなくても、近くで交わされる会話の切れ端くらいは、耳が勝手に拾ってしまうものだが。

「じゃあ、準備はいいわね。司、もう行ける？」と、響子。

「ああ。後に引くわけにはいかないな」相変わらず小声で聞き取りにくい、司が答える。

「当たり前じゃないの。元といえば、あなたが言い出したことじゃない。ここまで来たら、最後までしっかりやってよね」

「分かってる」

何の話だろうな、と明はぼんやり気になったが、それよりもこれから書き上げなければいけない報告書の方が気になっていた。すぐに二人の会話はほかの喧騒の中に埋もれ、聞こえなくなった。

その内に明は食べ終えた。二人はまだ話し込んでるな、と横目で見ながら席を立ち、屑入れにごみを放り込む。その視界の隅で、司の席の隣に、大きなトランクケースが置かれているのが映った。

ドアが開いて、閉まり、食堂の喧騒はそこで途切れた。

明はハツとして、いきなり立ち止まった。

これまでばらばらで意味を成さなかった違和感が、一つの閃きを元に、急速に結び合わさっていった。

…この何もない月面で、出かけるところといえば、実際のところ天文台ぐらいしかない。数少ない定期便のバスが出る時間も、もうすぐだったはずだ。

あの破損した通信ケーブルが繋がっていて、明が手際よく修理しなければ、基地本部との連絡が滞りかかなかった、月の裏側にある天文台だ。そして、『天の岩戸』の教義では、アマテラスが隠れているのは月の裏側で、その安寧を乱す天文台の存在を特に敵視している、と聞いたことがある気がする。

また、単なる観光客が天文台に行くのに、大きなトランクに入れていかなければいけないものなど、尋常な品では考えられない。尋常でないといえば、司のあの陰気な雰囲気はどうだ。カルト教団のテロリスト、という鋳型そのものじゃないか。

そういう特殊な精神的連帯に基づいているのなら、あれほど成熟した素晴らしい響子が、司よりも明らかにふさわしいステータスを持つ自分を袖にした事実にも、まさしく納得がいく。

明は、急に自分が重要人物になったことを知った。あのトランクに入っている品物がどれほど危険なもので、彼らがどこまで悪質なテロを計画しているのか知らないが、それを阻止できるのは、今のところ少ない手がかりから論理的な推理を閃きによって得た自分だけなのだ。

漠たる対抗策を練りつつも、今は一秒も時間を無駄にできないと心得、明は全速力で自室に向かった。

「おおい、そんなに急いでどうする。転ぶぞー」

誰かがのんきに注意をくれたが、明はそんなのかまっていられない。急いでおかげで、部屋に着くまでに二分とかからない。途中で転んだのは二度だけだ。人にぶつかったのは四度だったが。

帰還のための荷造りは半分終えていたのだが、その荷を解いて、中から片手にすっぽり収まるムービーカメラを取り出した。それをポケットに忍ばすと、部屋は散らかったままにして、次にまた食堂まで、全速で戻る。幸い今度は一度も転ばず、人にはぶつかりそうになっただがよけることができた。

息を整えるのに三十秒ほど待った。ポケットに忍ばせたカメラは、ボイスレコーダーにもなるので、そのスイッチを入れる。

意を決して入ろうとしたとき、ドアがスライドして人が出てきた。

「わあっ」

よけきれず、軽くぶつかってしまふ。いい匂い。やわらかい。すぐに半歩後ろに飛びのいた。

「あ、野田さん」

響子だった。「ア…っ」明は一瞬、驚愕で声も出ない。

姿勢を少し崩した響子を、すぐ後ろの司が肩に手を置き、支えていた。もう片手では、大きなトランクを引いている。眉をひそめ、不快を隠そうともしていない。

「すいません、どうも」

「ん」

明は響子に謝ったのに、司が極めて短い返事を発し、明の横をすり抜けた。

「ごめんなさいね」

その後を響子も追って行ってしまう。

明は慌てて、「ちょ、ちょっと待って」と、呼び止めた。

響子はその場で止まり、振り向いて気持ちよく待ってくれた。司

はそれよりも二、三步進み、響子がついてこないのを知ると、仕方なさそうに壁際にもたれた。

「このところ忙しくて、ジムでもあまり時間をすごせなかったんだ。久しぶり、響子さん」

と、明。心ならずも、響子と話す際にはいまだにうきうきしてしまう。司に聞かれているのを意識して、親しげに声をかける。

「うん、お久しぶり。忙しそうね、大丈夫？」

「まあ、なんとか。へろへろに絞られたけど、仕事はこなしたよ。あとは最後の報告書を上げるだけ。月基地の通信設備は、少なくとも次の定期点検までは僕が保証する」

胸を張る明に、響子は笑顔で祝福した。

「じゃあ、もう帰っちゃうのね」

「ああ、そうだね。明後日の便だね。だから、お別れの挨拶をと思つて」

「お疲れ様。地球でも連絡頂戴ね」

「もらったアドレスは絶対になくさないし、活用するつもりだよ」

彼女とアドレス交換までしているのを知ってたか、と明は司に挑戦の目線を投げた。だが、その表情は相変わらずで、期待したジェラシーなどは読み取れなかった。

と、明は大事な使命を思い出した。和気あいあいとした気分になつていない場合ではない。

「ところで、あんな大きな荷物を持つて、どうしたの？」

ポケットの中で、ボイスレコーダーは音もなく作動中だ。うまく話を誘導して、警備員を動かせるだけの尻尾をつかまなければならぬ。

「うん、ちょっとね。これから、天文台に行くのよ」

明はぎくり、とした。やはり！

「へ、へえ…。これからねえ。なにに？ で、あの荷物はなに？」

「何だつていいでしょうが」

うんざりしたように、司が質問をさえぎった。

「司……」

響子が困って、取り繕おうとする。

「そうだ、僕も最後に、天文台の見学に行ってみたかったんだ、仕事を抜きで。一緒に行ってもいいかな」

これはもう、十分な証拠を集めている暇はない、直接邪魔をしてやれば、諦めるのでは、ととっさに思いついて、勇気を振り絞った言葉だった。

これには当然ながら、司はもとより、響子でさえいい顔をしなかった。だが、司は決意を固めていた。どんなに嫌がられても、邪魔に入ってテロを阻止してやる。そして、願わくば響子の目を覚まさせて、足を洗わせてやりたい。こちら側の世界に連れ戻すのだ。

「でも、まだ報告書があるんじゃないの？」

なんとも言いにくそうに、響子が指摘した。司は冷水を浴びせられた心地がした。

その通りだ、こんなところで油を売っている場合ではない、すぐに仕事にかからなければ、締め切りに間に合わないではないか！

だが、そんな日常的な心配をしている場合でこそないのではないか。ことは人命にかかわる。

とはいうが、そもそもが証拠のない疑惑でしかない、今のところは少なくとも、ここで自分が何もしなかったとしても、よしんばそれによって何がしかの災害が防がれなかったとしても、自分としては誰からも責められるいわれはない。

いや、しかし……。

日常的責任と英雄的義務、順番としては……。

「そうでした」明はなんとか苦渋の決断を声にした。腕時計を見やり、「報告書、あと一時間で提出なんです。残念ですが……」

情けない声でそう言う明に、響子は同情を示したが、ほっとしている様子は隠しきれていなかった。司はくつくつと笑っている。

明は悔しさを原動力に、我ながら凄まじい集中力で、報告書をま

とめあげた。LANで送信することにより、提出が終わる。

さすがに、響子たちが乗るはずの定期バスは行ってしまうている。次のバスは二時間もあとだ。明はすぐさま、部屋に備え付けの端末で連絡を取った。

「はい、こちら交通センター。ご用件をどうぞ」

「バギーを一台お借りしたい」

「希望のお時間は」

「今すぐ。次のシフトが終わるまで」

係員はモニターの向こうで意表を衝かれた顔をした。「それは無理です」

「なんで！」予想された答えだが、明は抗議した。

係員は冷静に、「なぜなら、車の使用許可を受けてから、われわれが入念な点検をして、なおかつ燃料を補給しなければならないからです。今、手の空いている者がいないので、こちらでも急ぎますが二時間はみてください」

「緊急用の車は常時整備されているはずでしょう」

「あれは外部の方にはお貸しできません。ですが、そんなに緊急のご用件のですか？」

そう、テロリストが天文台に破壊工作をしかけにいったんだなどとは言えない。状況からの推論だけで何も確証がない上に、それを口にした途端、明の名前と告発内容が記録され、おそらく本格的な調査が始まるだろう。それだけの重大な責任を負うだけの確信はまだない。

「私はNT&TのSEです。天文台の通信設備に疑問な点が発見されたので、それを調査に行きたいのです」

「そんな用件のどこが緊急なんですか」

「もし天文台の通信設備に疑念どおりの不備があつたら、私はこれを修復しなければなりません。しかし、私は明後日の便で帰還する予定なのです。つまり、時間が足りない。今すぐに不眠不休で修理を始めて、やっと満足いく作業が完了する目算なのです。それとも、

私が一週間以上あとの便を待つ間の滞在費用を、あなたか基地か天文台か、とにかく我が社以外の誰かがもってくれるのですか？」

「知りませんが、その責任は少なくとも私にはないですな。でも、まあ、よろしい。今回に限ってだ。A 6番を使いなさい」

明の燃え盛る正義感、仕事熱心な新人社員の健気さとして映り、係員の寛容を引き出したらしい。

「ありがとう！」明は嘘を勢い良く並べ立てることができた自分に内心で驚きを覚え、相手に申し訳ない気分になった。「失礼を言うてすみませんでした」

係員は気軽に手を振り、通信を切った。明はその画面に頭を下げながら、部屋を飛び出した。天文台にはあらかじめ危険を知らせておくべきかとも思ったが、やめておいた。父が天文台の職員だという、響子の言葉が引つ掛かったのだ。天文台に教団のスパイがどれだけ潜伏しているのか分からない以上、軽はずみな行動はできない。最短時間でターミナルに着くと、指定されたバギーを探す。A 6番バギーを見付けると、明はIDカードを通して、さらに七桁の認証番号を入力し、ドアを開けた。エンジンを始動させ、目的地を天文台に設定する。そして、自動制御のエアロックを通り、彼は舞台に踊りだした。

簡易ナビシステムを監視すること以外、特にやることにない二時間余りの行程を利用して、明は頭を整理することにした。そもそもほとんど勢いだけでここまで来てしまったので、何が起きているのかの見当さえ、まだ漠然としたものだ。ましてや対策といえば、とっさに持ち出したカメラで悪事を記録してやろうという程度で、甚だ心許ないものである。

バギーは、あらかじめ入力されているなるべく平坦なコースを、センサーとデータを駆使して安全を図りながら走っていた。この上なく乾いた地面の上でタイヤが乱暴に回転した後には、もうもうたる砂塵が巻き上がり、無防備だか凡そ退屈な月面の風景に、間延びした変化を加えていた。

天文台がもうすぐ見えようかという所まで来ると、明は一切の不安が集中力に払拭されているのを感じた。もう、迷うのはやめだ。確かに彼らがテロリストだという確証はないが、そう疑うだけの材料は十分にある。

第一に、ケーブルの破損。第二に、司と響子の異常に長期にわたる月面滞在。この珍しい二つの出来事が同時期に起こった偶然を、見逃すべきではない。そして第三と第四は相互に関連が確実な、明との約束をすっかり忘れさせるほどの響子の取り乱しようと、その後の司を伴った天文台への訪問だ。しかも司は、得体の知れない大きな荷物さえ持っていた。更に、これらすべてを結びつけうる要因としての有力な候補さえある。すなわち、「岩戸の守」。

明が考えるに、一連の出来事の真相はこうだ。まず、司と響子が「岩戸の守」の一員という前提から、仮定は出発する。かの教団はかねてより、神聖たる月面の平安を乱す月開発に、公然と反対している。しかし、月開発は彼らも主張する経済的・合理的理由から遅滞はしても、なお中止はしない。そこで今回、ついにに実力行使に出ようと乗り込んできたのだ。もちろんこれだけの計画があつた二人だけで進んでいるはずはないが、実行グループは教団の理性的統制が及ばない、はねつかえりの小集団なのだと考える。

教団過激派は、慎重にも計画を二段階に分けた。まずは、今回の目標に定めた月面天文台における行動を容易にするため、そこに通じる通信ケーブルを切断した。実際に切断されたのは、いくつもあるケーブルのうち的一本だけだったが、あれは手始めだったのかもしれない。ちょうどその時にNT&Tの派遣社員である明が来ていて、目ざとくかつ有能にもそれを修理してしまったのは、彼らにとって大きな誤算に違いない。いや、もしかしたらその後、あるいは同時に、より見付けにくい妨害工作が施されていたかも知れない。出発する前にその可能性を考えなかったのは迂闊だ。だが、それも今更となつては、相手の狡猾さがこちらの手に負える程度であることを期待するしかない。

明が連日の作業に追われている間、司の姿を見ることは不自然なほど少なかった。地球に帰還した後の辛いリハビリを覚悟してまでジム通いをさぼっていたからには、それだけの重要な任務にかかりつきりだったということだ。ということは、普段、治安や軍事関係に特別な興味を寄せていない明には想像もできないような、入念な調査や緻密な破壊工作が、あの得体の知れない司によってすでになされているはずだ。

ケーブルの切断でも証明されたように、彼らは反社会的であることにためらいがない。抗議の意志を世界中に最大限報せるためには、人命の損失さえ顧みないかもしれないのだ。そのため、彼らの教義を冒涇するものの象徴である月面天文台に今いる職員は、真性の危険に直面している。

明がこのような、本当の意味で責任重大な立場に置かれるのは初めてだった。月に一人で派遣されたことなど、これと比べれば子供の使いだ。それどころか、どんな同僚も後輩も、ほとんどの先輩や上司でさえも、今の明ほど価値ある人間になった経験はないだろう。ましてや、明は見てみぬふりも責任転嫁もせずに、考え付き得る最良の方策に則って行動している。この上は、もう迷いは捨てて、みなぎるばかりの熱い勇氣に身を任せるだけだ。

遠くの丘の脇手から、丸いシルエットの建物が覗いた。人類が作り出した史上最大の光学レンズを擁し、百台近くに及ぶパラボラアンテナを従える天文学の城塞。遠目にも、建物の裾野に広く整然と居並ぶアンテナ群が壮観だった。

明は落ち着くため、大きく息を吐き出した。

第5節

「6月のSE」 5

前の点検の際にもおこなった所定の手続きを踏み、明は施設内に入った。幸い、まだ騒ぎなどは起きていない様子だった。早く二人を見つけなければ、と気は急ぐばかりだが、とにかくまずは事務室に向かう。

「おや、うちの点検はこの前終わったんじゃないんですか？」
事務室に詰めている管理人は、明の顔を見ると不審そうに聞いた。心なしか、この間のときよりも邪険だ。

「ええ、そうですね…」明はここに来て、一線を踏み越える覚悟を固めていた。「実は、ここに来たのは設備点検のためではないんです。少し前に、日本人が二人、ここに来ませんでしたか？」

もう、一刻の猶予もならない。自分一人で奔走するよりも、疑惑を打ち明け、人の手を借りてテロを阻止するしかない。

管理人からは、以外にも明るい調子の返答が返ってきた。

「おお、おお、あの二人のお友達でしたか！ そういうことだったんですね。それならそうと。お二人なら、まだ所長室のはずですよ。我々もそろそろ、用意しときましようか」

管理人は何を早合点したのか、明を急に仲間扱いした。明は血の気が引き、呆然と立ち尽くした。

なんということだ、この管理人までテロリストの仲間だったとは！ しかも、司と響子が所長室にいるということは、所長が標的として、すでに窮地に陥っているか、もつと悪くすれば所長さえも奴等の仲間だったということになる。

明はポケットにカメラしか入っていないのを悔やんだ。とはいえ、

事前に準備しようにも、この月基地で、一般人が武器らしい武器を持ち歩くなど、不可能ではあるのだが。

「あなた方はいったい、何をしようと！」明が進退窮まり、管理人を詰問しようとした瞬間、彼のデスクで呼び出し音が鳴った。

「ちよつと待ってくれ」管理人が明にことわり、クリックして呼び出しに答える。

『計画通りだ。始めてくれ』

管理人のモニタの向こうで、男が指示した。

「了解」

管理人が心得た様子で応じる。マウスをスツ、スツ、と動かし、カチカチ、とクリックする。

「何を！」

明が止めに入る間もなかった。部屋には突如、大音響が鳴り響いた。それが何なのか認識が追いつく前に、今度はパンパン、と部屋の外、続き部屋の向こうと、四方八方で乾いた破裂音が聞こえる。

銃声！

気づくと、目の前の管理人が、デスクの引き出しを開けていた。

「やめるー！」

彼が狙いをつける前に、明は横っ飛びで伏せた。

パン、と一つ乾いた音。明は伏せた体勢のまま、ビクリ、としたが、何秒かして、身体のだこも撃たれていないことを信じられるようになった。

そつと顔を上げる。そこには、はじけたクラッカーを持ち、あつけにとられている管理人の視線があつた。

「ど…どうかしたのか？」

気づくと、放送で流れるのは賑々しい楽曲だった。

明は立ち上がり、不自然な平静を何とか取り繕った。

「何ですか、この騒ぎは」

「なにつて…婚約祝いでしょう、所長の娘さんたちの」

「はあっ？」

明の視界は暗くなり、めまいに襲われた。

それから明は、我ながら甚だしく間が抜けていると思いつつも、管理人に教えられて、パーティー会場となる食堂に来ていた。

片手にカメラを持っているのを目にとめられ、式の撮影を頼まれさえた。元来律儀な明は、断れずにムービーモードで構えていた。そんなに広くない食堂に、明らかに定員をオーバーして五十名以上が詰め掛けていた。大皿の食事や簡単な飾りつけはすでに整っており、皆が普段着や仕事着のまま、思い思いに寛いでいた。すでにグラスを手をしている者も少なくない。

明もグラスを一つ取り、ぐいとあおった。強くはないが、アルコールが入っている。あまり酒は好きなほうではないのだが、続けざまにあおった。軽く話しかけられても、談笑の輪に加わるつもりはないので、挨拶程度に応じるのみだ。

突然ざわめきが変化し、続いて拍手が起こった。見ると、メインとなる入り口から、珍しくスーツ姿で髪の手入れもした司と、父であるう年配の男性にエスコートされた、幸せそうに微笑む響子が登場してきていた。響子のドレスは、簡素だが純白のものであった。

司は硬い表情で、響子の歩調に合わせようと気を使っているようだ。響子のほうは堂々としたもので、会場をゆつくりと見回して、来客の一人一人を認め、時々会釈などをしていた。

と、明とも目が合った。瞬間、響子は面食らった顔をしたが、すぐにほころび、あけすけな笑顔をくれた。明も、それに笑顔で応えなわけにはいかなかった。

二人が会場の前にしつらえられたひな壇 と言っても、単に上座の中央に設けられた席というだけだが に着くと、エスコートは離れた。

「エー、皆さん、本日はお忙しいところ、私たち二人のためにお集まりいただき、ありがとうございます」

司のあまりの紋切り型の挨拶に、会場から気安い失笑が湧いた。

司は困ったように変な顔をし、苦笑する響子が助け舟とばかりに言葉を継いだ。

「ごめんなさい、皆さん。私たち二人にとっても、本当に突然のことだったものですから。舞い上がってしまったって」ちら、と先ほどのエスコート役をねめつけ、「それというのも、ここにいる父が、当の私たちに内緒で、こんな素敵なパーティーを周到に用意していたなんて 今日ここに来るまで、思ってもみませんでした。まったく私自身プロポーズをされたのがほんの一週間前で、父への婚約の報告はついさっきだというのに、こういうことなのかしら。こんな先走りの父が所長なんてやらせてもらっていて、皆さんには普段から大変なご迷惑をおかけしていると思います。この場をお借りして、ごめんなさい、謝らせてください」

ぺこり、と響子がお辞儀をする。大丈夫だよー、とか、その通りー、とか、勝手な声が笑いを伴って乱れ飛ぶ。

「えー、先走りの父であり、所長からも一言挨拶をさせてもらおうか」と、エスコート役がざわめきを制して発言した。

「まず、司君、ありがとう！ 私はこの通り、家どころかほとんど地球にもいられない職業柄、これまで君に会うことはできなかったが、響子や妻から、まじめな良い青年だとは聞いていた。そんな君から、折り入って直接挨拶がしたい、ということわざわ月までくるというメールが入ったら、それはまさしくこういうことだろう、という見当は付く。直観と想像力こそが、一流の天文学者たる条件だからな」所長の最後のコメントに関しては、いや忍耐だ、記憶力だ、予算だ、とてんでばらばらの反論が上がった。所長はそれらを鷹揚に無視し、「残念ながら、娘の響子には天文学者たる素質には恵まれなかった。司君と一緒に月に来たい、月で響子の絵を描きたいのだ、と言われても、それを言葉どおりにしか受け取っていないかったらしい。私に言わせれば信じられん鈍さだが、その分うれしい驚きも大きいというものだろう」

調子に乗ってしゃべり続ける父に、響子は軽い非難を目で送った。

父はそれに気づかぬ振りだ。

「だがまあ、正直言つと、響子は、天文学者の素質こそないが、それ以外はまことに良くできた娘だ。親馬鹿と言われようと、これは自信を持って断言する。その娘が選んだ男なのだから、司君も即ち素晴らしい人間である、と当然の推論はできるのだが、どうもここで親の感情が入ってしまう。いや、もしかするところでもない奴が娘をだまして連れ去ろうとしているのではないか、と心配に囚われないでもなかったのだ。そのため、パーティー開始の合図は、二種類用意したところだ。一つは、先ほど流したワグナーの結婚行進曲。もう一つ、幸いにも使わずにすんだのは、ショパンの葬送曲だ」

笑いが湧き、拍手も起こった。彼は、本当に葬送曲も用意していたのではないか、と明は思った。

「だがしかし、今日、私はようやく安心することができた。短い時間だが、司君と言葉を交わすことによって、響子を本当に大切にしてくれるし、人間としても深みのある、これは得がたい人物だと確信した。その思いはまた、彼が響子に送ってくれた、婚約指輪ならぬ、婚約画を見ることによって裏付けられた」

そう言つて、所長は響子のほうに話を振った。その態度から、明らかに、件の婚約画の披露を催促していた。

「もう、勝手に話を進めて。ごめんね、司。いい？」

響子が司にことわり、彼がうなずくのを確認すると、あらかじめ机の下に入れてあった額縁入りの絵を取り出した。司が持っていたトランクに収まる大きさのやつだった。それを、響子が机の上に絵を立てせると、彼女の上半身はその後ろにすっぽりと隠れ、かすかに黒い髪だけが上から覗いた。

それは、ありふれた構図だった。荒涼とした月の大地。地平線の向こうには、漆黒の宇宙に星がちりばめられ、青く澄んだ地球が懐かしげに浮かぶ。その地球と対を成すように、月の岩に腰をかけて微笑む響子。着ているのは青い細身のドレスで、宇宙服ではない。

一瞬の沈黙の後、引いた潮が一気に戻るかのごとく、会場を揺るが

す拍手と歓声が沸いた。明も、あながちおざなりでもない祝福の拍手を送った。

絵の後ろに隠れる響子の、誇らしげに照れた顔が見える気がした。

「そうか、大変だったな」

明の報告を受けた小林は、ひとしきり大笑いすると、そういつた。「笑いごとじゃないですよ」今回の通信ではカメラも活かしていたので、明はモニターに向かってぶぜんとして見せた。「相当な覚悟だったんですよ。テロリストの巣に飛び込んだつもりだったんですから」

「そっかー。で、なに、まさかあの話、信じちゃってた？　『岩戸の守』がどうのって」

「嘘だったんですか？」

「うん、ごめん、うそ」

あっけらかんという小林に、明は不思議と腹もたたなかった。が、どつと疲れは増した。

「そ、そうですか。いや、そうだとは思っていましたよ、もちろんでもね…」

「でも、なに？」

「英雄になれると思っただですよ、勇気を出せば」

明は口に出してみても、改めて自分の英雄願望の強さを思い知った。それは、子供の頃には、いつかは実現すると根拠なく抱いていたが、大人になになるにつれてだんだんと薄れていったもの。しかし今回、おそらく生まれて初めて行動と結び付けて、強く蘇ったものだった。明は不覚にも、涙ぐみそうになってしまった。

「では、すみませんが、また課長への報告はお願いできますか？」

返事が返ってくる前に、すでに指は通信を切るボタンに伸びたが、

「ああ、待て待て、切るな」

と、小林に慌てて引きとめられた。

「なんです？」

「すまんかった、からかって。本題に入るよ」

小林の口調に、明はいずまいを正した。真剣なふりをして、実はからかわれたことも一度や二度ではないのだが。

「その響子さんだかな、美人か？」

「切りますよ」

「違う、そうじゃない。まじめに聞いているんだ」

「美人ですよ。すごく」

「お前がいうんだ、相当だな。よし、いくことにしよう」

小林は明らかに雰囲気切り替えて、説明を始めた。

「俺が今参加してるプロジェクトだかな、旅行会社や広告代理店なんかと合同で、宇宙観光産業を復興しようってやつなんだ。うまく当たって軌道に乗れば、うちが請け負える設備やサービスの規模は半端じゃない」

明も門外漢ながら、噂ぐらいは聞いたことがあった。長期的に見れば社運すら賭けた、本当の花形プロジェクトだ。

「今一番の課題が、起爆剤になるような話題性なんだ。お前の話を聞きいてたら、その月面婚約式がいけそうだと思ってな。カメラも回してたんだよな。それをメディアに流してもいいか、お前から当事者の二人に交渉してみてくれないか？」

「メディアに、ですか？」

「そう。思いつきりロマンチックな二人に仕立てあげてやる。世界中の誰しもが真似したくなるくらいにな。有名人になるぞ」

「それはあの二人、あまり喜ばないかも知れませんが」

「なに、これから結婚式や新生活で、もの入りになるんだろう。こちらもけちな報酬を提示するつもりはない。そうだ、どうせなら月面結婚式をプロデュースさせてくれたら、なおいいな」

小林の頭の中では、すごい勢いでこれからの計画が組み立てられていくようだった。明はしばらくしてからようやく胸に落ちると、覚悟が決まった。

「わかりました、話してみますよ」

「そうか、やってくれるか！　よし、じゃあついでに、天文台の所長にも挨拶しておいてくれ。今後、月とうちとのパイプ役が重要になってくる。愛娘の友人として婚約式にまで出席したんだ、なにかと親しみを持ってくれるだろう」

「は、パイプ役？　といっても、僕はこれからも月基地と交渉を持つわけでは」

「やるんだよ。お前は俺のチームに引き抜くからな。お前を月との窓口を立てるつもりだ」

思いもかけず、明の目の前に華々しくも困難な前途が開けた。

「わかりました。よろしくおねがいします」

「がんばれ。ヒーローになれるぞ」

「地味ですけどね」

それでも、がんばりますよ。こちらは命をかけたヒーローのなりそこないなんだ。地味なヒーロー、望むところだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n11111d/>

6月のSE

2010年10月8日15時41分発行